

1 疫病【病原体：Phytophthora 属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 主として下葉の葉先付近に発生し、多湿時には病斑の裏面、とくに健全部との境界に霜状のカビを生じる。茎や、塊茎にも感染する。春作では、早い年は4月下旬頃から発生し始め、雨天が多いとまん延が著しい。秋作では比較的少ないが、10～11月頃発生する。
- 2 17～20℃ぐらいの比較的低温で多湿の時に発生しやすい。
- 3 り病種いもや、ほ場に放置されたり病屑いもなどが伝染源になる。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 常発地では耐病性の強い品種を栽培する。
- 2 健全な種いもを用いるとともに、収穫後は被害残さの処分を行う。
- 3 感染防止のため、塊茎の収穫は、天気の良いときに掘取り、土を良く乾かしてから貯蔵庫へ収納する。

C 薬剤防除のポイント

発生を認めてからの薬剤散布は効果が十分でないので、発病期には予防散布に努める。



農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

2 そうか病【病原体：*Streptomyces* 属放線菌（細菌）】

A 発生態

- 1 塊茎表面に褐色でかさぶた状の病斑を形成する。
- 2 土壌のpHが5以上のところで発生しやすく、石灰や堆肥を多く施用すると発病を助長する。塊茎肥大始期以降の感染時期に土壌水分が60％程度になると、ほとんど発病しない。
- 3 土壌伝染と種いもにより伝染する。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 土壌を酸性に保ち、酸性肥料を用いることによって発生を軽減することができる。この場合土壌のpHが5を超えないことが望ましい。
- 2 塊茎肥大始期以降に散水を行い、土壌水分を高める。
- 3 検疫済の種いもを選び、発病ほ場では連作を避ける。
- 4 常発地では耐病性の強い品種を栽培する。

C 薬剤防除のポイント

クロルピクリン剤の土壌消毒も有効であるが、土壌消毒だけでは効果があがらない場合も多いので、併せて種いも消毒を行う。



農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



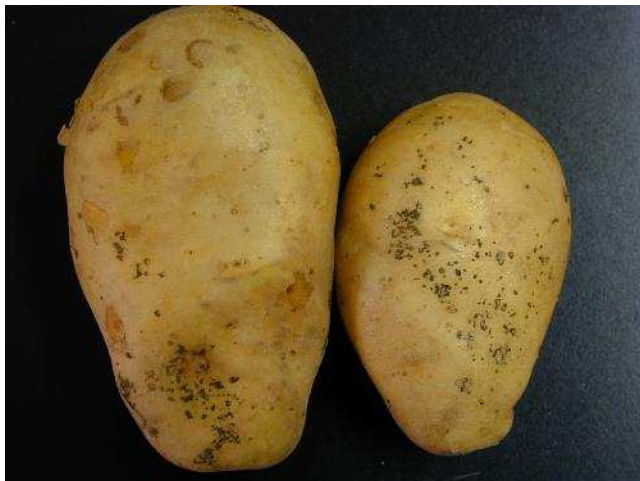
熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

3 黒あざ病【病原体：Rhizoctonia 属菌（糸状菌）】

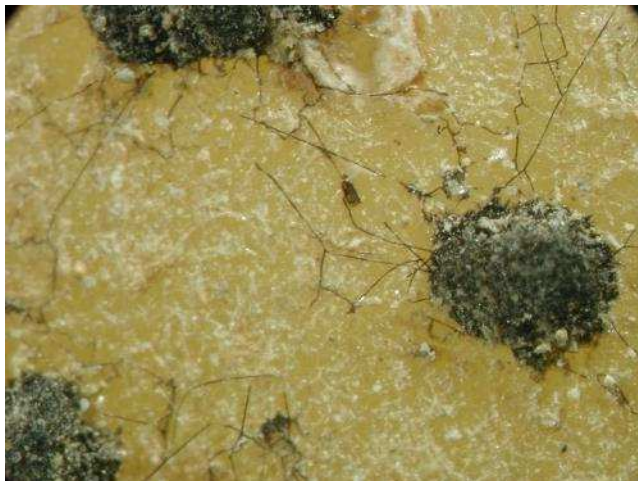
A 発生生態

- 1 塊茎の表面に黒褐色で不整形のあざ状の菌核を形成する。生育中の茎が侵されると頂葉が小型となり上方に卷く。
- 2 春と秋の2回発生するが、春作で被害が大きい。一般に多湿の酸性土壌において発病が多い。
- 3 種いもと土壌により伝染するが、種いもによる伝染が強い。

いもの病徴



塊茎上の菌核



B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 検疫済の種いもを選ぶ。
- 2 幼芽の被害を避けるためあまり深植えしない。
- 3 多発生ほ場では、土壌の酸性を矯正する。
- 4 排水を良くして過湿を避ける。



農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

4 輪腐病【病原体：*Clavibacter* 属細菌（細菌）】

A 発生生態

- 1 初め小葉が黄化し、後に株全体が萎縮・萎ちょうする。茎を切ると、維管束が褐変し、切断部から乳白色の粘性のある細菌液が出る。
- 2 病原細菌は、種いもにより伝染するが、り病種いもを切断した刃物でも伝染する。
- 3 掘り残しのり病いもは農機具による接触伝播につながる。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 健全な種いもを選ぶ。
- 2 種いもの切断に際しては、切断刀を交互に使い、その間熱湯に数秒間ほどつけ消毒しながら使う。
- 3 発病株は直ちに抜き取る。



農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

5 青枯病【病原体：*Ralstonia* 属菌（細菌）】

A 発生生態

- 1 茎が頂葉から萎れ、その後株全体に及ぶ。茎の地際部を切ると維管束が褐変し、汚白色の細菌液が漏出する。
- 2 多湿土壌での発生が多く、また、ネコブセンチュウの加害が本病を助長する。
- 3 病原細菌は、土壌中で長期間生存し、土壌伝染を主体とするが、り病種いもによる伝染もする。
本病原菌は、バレイショの他トマト、ナス、ピーマン、タバコ、イチゴなど多数の作物を侵すので、バレイショを初めて栽培するほ場でも注意が必要である。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 健全な種いもを選ぶ。
- 2 ほ場の排水を良くし、多湿を避ける。
- 3 秋作の場合、高温期を避け、できるだけ遅植えにする。
- 4 発病株は抜き取って処分する。

維管束の褐変



細菌泥の漏出



農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

6 ウイルス病【病原体：下表の通り（ウイルス）】

A 発生生態

- 1 バレイショのウイルス病には数種あり、伝染方法も異なる。病原ウイルスと伝染方法は表のとおりである。
- 2 P V Y－えそ系統は、タバコ黄斑えそ病の病原ウイルスでもあるので、タバコの隣接地では注意する。

バレイショ主要病原ウイルスと伝染方法

病名	病原ウイルス	伝染方法			
		種いも	汁液	土壌	アブラムシ
葉巻病	ジャガイモ葉巻ウイルス（P L R V）	○	×	×	○
Yモザイク病	ジャガイモYウイルス（P V Y）	○	○	×	○
Xモザイク病	ジャガイモXウイルス（P V X）	○	○	×	×
キャリコ病	アルファルファモザイクウイルス（AMV）	○	○	×	○
モザイク病	キュウリモザイクウイルス（CMV）	△	○	×	○

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 検疫済の種いもを用いる。
- 2 発病株は、早期に抜き取る。

C 薬剤防除のポイント

媒介虫の防除（ナス科虫害の項を参照）

P L R V、P V Y、AMV、CMV：アブラムシ類の防除を行う。



農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！